

基本は「習うより、慣れよ」

事例を集め、活用法を取捨選択し、ノウハウを共有する

学校の孔版印刷は、長年、モノクロがスタンダードだった。その歴史に新風を吹き込む2色印刷機の登場は、ハード面の革新にとどまらず、教材開発や通信づくりなど、学校におけるペーパーベースの情報発信のあり方を大きく変える可能性を秘めている。

導入校の「2色前」「2色後」をみるなかで、その可能性を探ってみた。

■悩むより、まずやってみる

新潟市立山の下中学校(河野裕校長、生徒480人)が2色印刷機(リソグラフ)を導入したのは、2010年7月。それまで使用していた印刷機の維持管理費がかさみ、買い替えを検討していたところ、折よく同年4月に教育委員会が2色印刷機を購入対象機器として“解禁”。だが、前例はほとんどない。学校現場でどの程度、有効活用できるか、費用対効果が見込めるかは悩むところだったと、事務主任の近藤聡さんは振り返る。

「そう思いながらもなぜ導入したかという、2色印刷という未知のものは実践してみないと効果も弱点も見えてこないと思ったから。悩むより、まずやってみて、その結果わかったことを新潟全市に発信できれば、というチャレンジ的な気持ちもありました」

とは言うものの、予算確保のためには校

内のコンセンサスを得る必要がある。

「先生方は、なるほどモノクロよりインパクトがあるねという感じで、反対意見はほとんど聞かれませんでした。最大のハードルはコストの問題。マスターが2枚、インクも2種類必要になるわけで、私たちも管理職もそこがいちばん気になりました」

本来、事務職員の職務は、無駄な支出を省き、適正な予算執行を行うことが前提。

「その一方で、金額の多寡では測れない教育効果という側面も視野に入れる必要がある。いかに視覚でインパクトを与え、学校の通信類に興味をもってもらうか、わかりやすい教材づくりにつなげていけるか。それを念頭に置いて最終的に導入を決定しました」

購入形態は、教育委員会が学校配当予算を引き上げるかたちでの導入となった。このよ



事務主任・近藤聡さん

うに学校独自の予算で、学校現場が主体的に選定理由を掲げて2色印刷機を導入するケースは、今後、増えていくのではないだろうか。

■生徒の反応に確かな手応え

「当初は全員が恐る恐る、怖いものを触るような感じでした」と近藤さんは笑う。

原稿は手書きか、パソコンで作成したものをプリントアウトした紙原稿を使っている。ヘビーユーザーは、養護教諭の松本恵さんと、司書の大久保美雪さん。「保健室だより」「食育だより」「図書館だより」は、毎回2色で発行されている。大久保さんに、モノクロ印刷との違いを聞いてみた。

「生徒の反応が違います。本の返却日なども赤で強調したら、以前より返却率が高くなったように思います。図書館の行事予定も赤で目立たせると反響が違いますね」

図書館だより最新号の裏面には、「年末図書宝くじ 今年もやります!」と何やら興味をそそられる記事が……。図書宝くじとは、本を借りると1回1枚の宝くじ券がもらえるもので、当選者にはブックカバーや絵がきセットなどがプレゼントされる。景品は、学校で購入した雑誌や本の付録、ポイ

ント景品などを有効利用。つまり予算はゼロである。生徒にもっと本に親んでもらいたいという大久保さんの工夫のひとつだ。

■他の経費節減で印刷費を捻出

「活用法としては、まだまだ初歩的な段階。パソコンから印刷指示を出せる環境も整っていますが、いまは先生方の様子見ですね。今後、段階を踏んで、USBや校内LANを介した印刷へとステップアップしていければ、もっと2色のよさを活かした使い方ができるのではと思っています」と近藤さん。

事務室に隣接する印刷室には、モノクロ印刷機と2色印刷機が設置され、年間印刷枚数は、前者が約44万枚、後者が約50万枚と、2色印刷機のほうが多い。

「ただし、50万枚のうち10万枚くらいはモノクロ印刷でしょう。できるだけ使い方に慣れてほしいので、先生方には、モノクロ印刷するときでも気軽に2色印刷機を使って

ほしいとお願いしていますから」

消耗品のコスト増は、事務室の予備費を削減するなどして調整、相殺した。「教科や教務分掌に関する予算は削りたくない」と近藤さん。事務方としての矜持がうかがえる。

■2色印刷で訴求力アップ

導入後1年3カ月を経たいま、近藤さんが実感している2色印刷の効果とは？

「まず、情報としてのわかりやすさ。強調したい部分を赤にすることで、自然にそこへ目が行く。これは情報を伝達するうえで重要なポイントです。養護の先生は、保健室だよりで風邪予防にマスクの着用を呼びかけた記事（資料左）について、以前、同様のものをモノクロで配付したときに比べ、着用率が上がったようだと言っていました。通信類なども保護者へのアピール力が違うようです。ふだん学校からの通信類にあまり目を通さない方も、2色だと一旦手が止まるらしい」（笑）

これで第1段階はクリアかな、と近藤さん。第2段階は、授業にどう活用するかだ。



2色刷りの「食育だより」を手にする事務主事・齋藤拳さん

「手始めとして、振り返りシートなどが最適かなと思います。学校だより、学級だよりなどの通信類に2色印刷が普及すれば、教材への活用も進むのではと期待しています」

同校は、「あ・じ・み・こ」（挨拶、時間を守る、身だしなみ、言葉づかい）を生徒指導のスローガンに据え、規律正しい生活の励行と学校行事の充実を図っている。毎年秋には黎明祭（体育祭）、^{しのめ}諸声祭（合唱祭）^{もろごえ}が開催され、訪れた保護者や地域住民で活況を呈する。こうした行事のパンフレットやプログラムも、やがて2色印刷となることだろう。

■いずれは生徒会新聞への活用も

教職員だけでなく、現在、学校のモノクロ印刷機を使って生徒の手で印刷されている「生徒会新聞」などにも大いに活用してほしいと、近藤さんは意欲的だ。ゲーム感覚で面白がって使っているうちに、どこを強調したとか、何を伝えたいかという情報伝達の基本を学んでもらえるのではないかという。

「学校中でみんなが気軽に活用し、情報発信して、生徒や保護者、教職員からたくさん評価を受けてほしい。そのなかで2色印刷の利点・弱点を明確にし、教育活動における有効性を検証し、高めていきたい」

最後に、大久保さんが先駆的な学校ならではの愉快的エピソードを教えてくれた。

「市内の学校司書の集まりで初めて2色刷りの図書館だよりを見せたときは、他の学校の方から質問攻めにありました。これは何？ どうやったの？ 手で色を塗ったの？（笑）。2色印刷機で作ったと言うと、えーっ！ そんなのあるの?!と、ものすごくびっくりされて、ちょっと鼻が高かったですね」

■キャリア教育で商店街を元気に！

山の下中学校が目指す「第2段階」の活用のノウハウを実践研究というかたちで積み上げてきたのが、新潟市立新潟小学校（伊藤充校長、児童557人）だ。同校は、長年、「たんぼぼ学校」の愛称で親しまれてきた地域有数の教育先進校。「キャリア教育」「図書館教育」「体力向上プロジェクト」など多彩な教育実践を展開している。

学校広報官の栗田貫さんに、まずはキャリア教育について話を伺った。中心となるのは体験学習だが、その充実した内容はなかなかのもの。なかでも、地元の古町商店街とのジョイントで、児童が育てた野菜を使ってオリジナルの「古町スイーツ」を考案し、実際に店舗で販売する取り組みには驚いた。販売店とお菓子をイラスト入りで紹介した「古町スイーツマップ」も作成し、地域に配付。紙面には、「キラキラフルーツパン」「ふわふわパウンドケーキ」など可愛らしい商品名が並ぶ。毎年、新作スイーツが生まれ、お店の看板商品となっているものもあるそうだ。

「図書館教育」でも多様な取り組みが行われている。そのひとつが「おすすめ本リレー」。図書館に足を踏み入れると、まず目につくのが小さなイーゼルに立てかけられた数々の本。こんなカードが添えられている。「おともだちがおすすめする本です。読んでみませんか？ かりていく人は、つぎの人のためにあなたがおすすめする本をここにかざってね」

こうして子どもから子どもへ、エンドレスで本のリレーが続いていく。アイデアを思いついたのは、司書の吉田文恵さん。

「私自身が読んでほしいと思った本を棚に



学校広報官・栗田貫さん

飾ったのが始まりですが、子どもたちは、自分の置いた本が借りられてなくなっていると、すごくうれしいみたいです」

本の年間貸出数が10万2260冊（2010年度）に上るのもうなずける。

5年前に始まった「体力向上プロジェクト」は、運動、生活習慣、食育を含む総合的な健康づくりの取り組みだ。その原点といえるのが、50年近い歴史のある「朝マラソン」。

「毎朝10分間、晴れた日はグラウンドで、雨の日は体育館で、全校児童が走ります。遊び場所が少ないうえ、最近の子どもは遊ぶ時間もないので、運動不足になりがち。その対策として長く続いているものです」

■学習意欲を高める 2色の学習プリント

同校の2色印刷機の使用は、2007年9月、理想教育財団の研究助成校モニターとして、2色印刷の教育効果を探る実践研究に取り組んだことが起点になっている。研究助成の申請を行った栗田さんに、その動機を聞いた。

「見やすくわかりやすい学習プリントを作りたい、それによって子どもの学習意欲を高め、学力向上につなげたいという思いがあり、それには2色印刷機がうってつけだ

と感じました。学習課題や注意点などを赤色で目立たせる、社会の白地図に赤で川や道路を示すなど、モノクロでは伝わりにくいことも2色なら一目瞭然です」

導入1年目は、どんな教材に活用できるか、どこに赤を使えば効果的か、どんな使い方ができるかなど試行錯誤を重ねた。まずは2色印刷機の可能性を探ることが重要と考え、しぼりを与えず自由に使ってもらうことを優先。2色の教材をできるだけ多く蓄積し、「これは使える」「いいね!」というものを発見していこうというのがねらいだった。

その発見を集約し、教職員間で知識の共有化を図るため、印刷室には「2色刷りで作ったものを1部、ここにしてください」と書いた箱も置いた。児童へのアンケート調査を行ったところ、「わかりやすい」「勉強が楽しくなった」などプラスの評価が大半を占めていたことも励みになった。

1年間の研究助成期間を経て、使い方が浸透。次年度からは、研究よりも授業でどんどん活用していこうという方向に転換した。そのなかで、答えやヒントを赤で印刷し、赤いシートをかぶせると見えなくなる



事務主任・小川洋子さん

H23の扶養申告書は、**年齢で記入欄が違います。**

H23.1.1から改正
子ども手当支給対象年齢と高校授業料無償化の対象年齢が所得税の扶養控除から外されます。住民税は変わらず控除対象です。

事務室から発信する文書にも2色印刷を活用

ものなど、工夫を凝らした教材が生まれた。

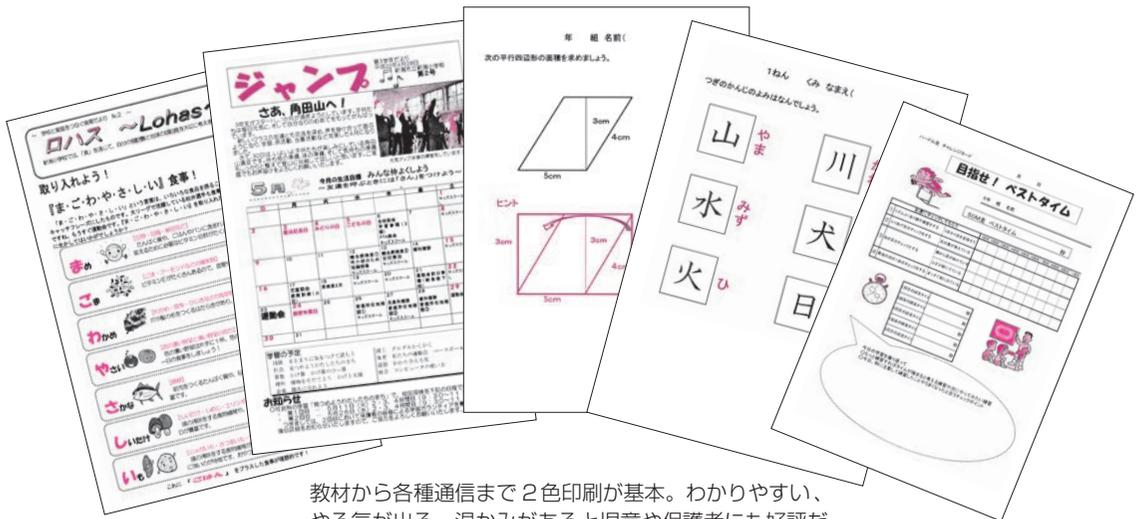
教員にも好影響が出ている。学習プリントを作成する際、どこを赤にして強調すべきかなど、よりよい提示の仕方を考えること自体が教材研究への刺激となり、教員のスキルアップにつながることを実感したという。

■事務室でも大活躍の2色印刷

研究助成期間中は、インクやマスターなど消耗品も無料で提供されるが、2年目からは学校予算で賄わなければならない。事務主任の小川洋子さんに不安はなかったのか。

「ちょっと心配でしたが、実際には他の予算にしわ寄せがくることもなく済んでいます。2009年度から文科省の研究開発学校に指定されたことで、予算に多少余裕が出てきたことも幸いしました」

小川さん自身も、教職員に配付する「年末調整の扶養申告書の書き方」など各種プリント類に2色印刷を活用している(資料上)。



教材から各種通信まで2色印刷が基本。わかりやすい、やる気が出る、温かみがあると児童や保護者にも好評だ

「書類の書き方などを説明する文書には、2色印刷が最適。記入の注意点や記入例を赤色にすると格段にわかりやすい。パソコンと印刷機がLANでつながっているので、原稿をデータで送れるのも大きな利点です。この方法だと、細かい色分けがパソコン上でできるので重宝しています」

■いまや2色がスタンダード

「カラー写真も自動的に2色分解され、けっこうリアルに仕上がります。子どもの写真をふんだんに取り入れた学年だよりや学級だよりは、モノクロより温かみがあると保護者にも好評」と小川さんも嬉しそうだ。

保健だより、図書館だより、給食だより、食育だよりなども、すべて2色印刷だ。

「いまや印刷物は2色がスタンダード。作るほうも見るほうも当たり前になってしまって、2色印刷機がなければ業務が回っていかない」と栗田さんは苦笑する。

印刷用紙にピンクや黄色の色上質紙を使うこともある。カラー用紙を使うと一層目を引くし、紙の色にインクの赤が重なって微妙な色合いが出せる。新入生の保護者に送

る封筒の表書きにも2色を活用。「祝入学」の「祝」の文字を赤にして好評を得ている。

「学習プリントや通信類は、学校でもっとも日常のかつ頻繁に使われるツールです。授業も行事も多種多様で、とても忙しい学校なので、効率アップや時間短縮に役立つ機器は多少お金がかかっても積極的に取り入れていきたい。結果的に、それが効果的な教材や資料づくりにつながり、よりよい教育活動につながっていくと思うので、そのための環境づくりを頑張ろうと思います」

小川さんの言葉に、新しい教育実践は、こうした教育環境を支えるプロの存在があってこそ成立するとの思いを強くした。

山の下中学校と新潟小学校。状況は異なるが、2色印刷の可能性に魅力を感じ、実践を重ねてきたプロセスはよく似ている。さらに、その教育効果は、学習意欲の向上や教材研究のスキルアップにつながる確かな成果として現れている。先例のない実践は、つねに試行錯誤の繰り返しだが、それは次に続く学校にとって貴重な情報となるだろう。

※本文中の赤色は、2色印刷機による実際の色とは異なります。